

仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
 980 仙台市本町一丁目2番12号
 電話〇二二二二二二一七三七七番
 編集・発行人 首藤 正義

カトリック広報は

「福音宣教」の担い手

教区広報担当者全国会議が、9月25日から27日まで、松島で開かれた。2、3の教区を除く全国から担当の司祭・信徒、そして糸永、相馬の両司教を含む20人が集まった。

講演、分科会、全体集会がもたれ、武市英雄氏(上智大学・新聞学科)が「福音宣教をめざす教会広報のあり方」について話された。講演の要旨は以下の通りである。

カトリック広報とは何か

報道・宣伝・広報はパブリック・リレーションと言われ、事業内容を広く世に知らせることを意味する。PRという言葉は連合軍が日本で使いはじめた言葉で、昭和20年代はパブリックインフォメーションと言われていた。このPIが広報と訳された。日本ではPRとPIが同じように使われている。ウエブスターの辞典によると、広報とはものごとをあまり知らせざること、隣人とのつきあいを深めることの意味である。カトリック広報の場合も二つの意味がある。①カトリック内のお知らせ

せ、教えの周知徹底。②日本の社会に対し、教会としてお知らせし、信頼関係を作ること。

いま何を広報するのか

コミュニケーションのモデルには五つのポイントがある。①誰が②何を③誰に対して④どのような媒体を介して⑤どんな効果を期待して。そこで、何を広報するかをはっきり意識する必要がある。

教会は、今、何を一番優先させて広報すべきか、問われている。同時に、それは日本社会と切り離して考える訳にはいかない。カトリックだから出来ること、的を絞ることが肝要。日本では、具体的に損得の感じにくいものは手薄である。目に見えにくい問題、例えば人権、難民、差別、平和など。それらを取り上げることよって、カトリック広報イコール福音宣教になっていかねばならない。

むすび

武市氏は他に「誰に対して」「広報の諸問

題」に触れたが、主にカトリック新聞に関することであつた。その中で特に強調されたことは、教区報とカトリック新聞との連動。カトリック新聞に対して当事者意識を持つ必要性についてであつた。

！司教座移転50周年記念

仙台教区大会



メインテーマ
 「明日の教会を
 めざして」

期日：昭和61年9月14日(日)・15日(月)
 場所：仙台白百合学園

司教様の日程 (10月1日現在)

- 10月20日 四ツ家教会堅信
- 20~22日 難民定住対策特別委(東京)
- 23~24日 聖カタリナ短大創立20周年記念講演(四国)
- 10月25~11月6日 ICMC、カリタス・インターナショナル(スイス、ローマ)
- 11月7日 宗法連実務研修会(仙台)
- 10日 白河教会堅信
- 11日 司祭評議会(仙台)
- 11~12日 カリタス・ジャパン担当者会議(東京)
- 13日 人権福祉委員会(東京)
- 17日 一関教会堅信
- 18~21日 VISAR・国内エクスポー
- シア(京都)

司牧評議会定例会議

9月23日 於・元寺小寺教会信徒館

第17回司牧評議会定例会議が9月23日(秋分の日)、佐藤司教以下21人の評議員が出席して開かれた。議題と討議内容は次のとおり。

- (1)カテドラティクム1%アップについて。これは前回からの継続審議のもの。教区の宣教司牧の活動のために、司牧評議会として昭和60年度からのアップに賛成するという結論を見た。同時に、小教区教会の財政基盤をしっかりとしたものとするために、教会維持費についての教育と信徒の協力が強調され、維持費増収をはかるべきことに意見が集中した。
- (2)教区大会について。二つの講演と、パネル。

< 若者の声 >

いわき市には、平、小名浜、湯本、勿来の4教会があります。現在、二人のドミニコ会の神父様でこの4教会をうけもつておられます。

この4教会を中心に青年の集まりがあります。この集まりは結構前からあり、一時期はかなり人数が多かったようですが今は教人(7人程)で様々な活動をしています。人数は少なくともそれぞれ皆、個性が強く量より質の活動をしていると言えるでしょう。

11月上旬には郡山で福島県の青年のつどいが予定され、郡山教会の青年の方々と共に

いま、浜通りの青年達は

準備中で、県下の青年との出合いに期待しています。また、11月下旬仙台で行なわれる教区レベルの青年のつどいにも乗りこもうと計画しているところです。

それぞれの記事などを通じて、新しい出合いが生じたら、お互いの結びつきがもっと強くなれば、また新たなキリストとの出合い

があればと思っています。外に開かれた教会を目指し、金子力以下数名は、目立たないながらも、時間の制約・移動の不便さなど、ハンディを乗り越え、輪を広げつつあります。

(佐藤 潔人)

ディスカッションを「目玉商品」とする大会プログラム(教区報9月号参照)、予備調査、実行委員会の動き、等についての報告ののち質疑応答に移る。参加に向けて信徒を結集するために、情報(大会ポスター、宿泊に関するもの、参加費用、懇親会等)を早く得たいという要望や、パネル・ディスカッションを小教区での話し合いを土台とした内容とすべきこと、等の意見が出された。

- (3)常任委員改選。5名の常任委員を選出。
- (4)その他。メキシコ大地震救援のため教区として募金を行ない、福島県のグアダルーベ会を通して援助したい。協力をお願いする(佐藤司教)。国際協力委員会からのアンケートに答えるための話し合い(平賀神父)以上。

「宣教百年」を祝う

―会津若松教会―



福島県下で最も古い歴史を誇る会津若松教会の宣教百周年を祝い記念式典が、9月16日、会津若松ザベリオ学園で開催された。

『第16回福島県カトリックの集い』と合わせて行われたこの式典には、県内外から四百人近くの信徒が集まり、佐藤千敬司教主司式の記念ミサ、H・チースリク師(聖心女子大学教授)の講演を通し、百年の歴史の重みをかみしめた。

午前10時の記念ミサに続いて、ことし4月に同教会の主任に就任したばかりのハイメ・ラレス神父がグアダルーベ宣教教会があいさつに立ち、

「神は百年の間、多くの恵みはこの教会に注いできてくれた。歴史の節目を迎えてわれわれは、改めて教会の現状を見つめ、信徒としてどうあるべきか、どう生活すべきかを思索し、自らに与えられた環境の中で勇気を持って神のみこころを伝えよう」と、情熱をこめて信徒たちに呼びかけた。

会津若松教会の歴史は一八八五年(明治18年)、パリ外国宣教会のラフォンテ神父が、旧家を購入、新聖堂として祝別式を挙げた時に始まる。東北地方特有の閉鎖性と交通事情の悪さの中で、宣教師、信徒たちは布教活動を続け、明治、大正、昭和の各時代を乗り越えてきた。

カトリック福祉施設

合同研修会



9月25日から27日まで、仙台市戦災復興記念館を会場にして、東北・北海道地区のカトリック社会福祉施設のうち、老人、児童、保育3業種の合同研修会が行なわれた。これは現在、日本の社会福祉が大きな転機を迎えており、総合的視野と業種をこえた相互の連携とが求められているという状況の中で、カトリック社会福祉もそれに応えるべく、初の試みとして前記3業種の東北・北海道ブロックが企画したものである。

元家庭裁判所判事、森田宗一氏を講師として、「現代の家庭の変容を、どう見て、どう対応したらよいか」というテーマのもと、約70名が集まり、老人、心身障害児、養護、保育の各現場からの発表をもとに、業種混合のグループ討議、テーマについての森田氏の講演、業種別懇談などが行なわれた。

森田氏は、ケースこそ施設活動の先生であるとして、あたりまえのことがあたりまえになつていない現代において、カトリック施設こそ勇気をもつて「あたりまえを発掘」すべきであると説いた。

最終日、佐藤司教様と3人の司祭で閉会ミサがささげられ、参加者は、初めての合同研修会で従来の業種別研修からは得られなかつた相互理解と、カトリックの施設活動へのより広い視野とを得て解散した。なおアンケートでは2、3年に1回、この種の合同研修会をと

いう希望と、全国規模への拡大の希望とが多く見られた。

C・L・O全国運営委員会………

開かれる………

9月14日から16日の3日間、光ヶ丘研修所で、C・L・O(クリスチャン・ライフ・コミュニティ)の運営委員会が開かれました。このC・L・Oは、自分たちの生活の体験をグループ(コミュニティ)の中で分かち合い、そこで生活の見直しをし、深めようとするものです。そのことによつて、新たに前進する力を得たいと願っています。

例えば、聖イグナチオの霊操、つまり聖霊の働きを聞きわけ、それを自分の生活の中で生かし、生涯の生き方として身につけることなどもとり入れていきます。

福岡、広島、東京、北海道など全国から運営委員が集まり、各担当からそれぞれの仕事の報告や、来年3月に姫路市で開かれる全国世話人会の運営などについて話し合いました。広島イエズス会の岡神父様司式による朝のミサに始まり、話し合い、昼食会、夕の祈りまで、すべて神様のお恵みのうちに、豊かに会を進められました。

C・L・Oは、15年以上前に生まれ、小さな共同体(5~10人)が全国に37あります。東北では仙台に二つの小さなコミュニティがあり、毎月2回例会を持ち、分かち合いをしています。自分を与え、相手を受け入れようと真剣に取り組みひとりひとりが、お互い

に助け合つて、神のよびかけにこたえようとつとめています。

ひとりでも多くの仲間が、この共同体に加わつて分かち合いをして下さるよう、祈っています。

連絡先 泉市向陽台4-14-12
重野由紀
Tel 0223712-8485

水沢教会 新聖堂完成



春の寿庵祭が行われる教会として親しまれている水沢教会(ヨハネ・ローネル神父)はこの度、市の市街地再開発計画に協力、市内川端に移転新築となり、9月14日、新聖堂の献堂式、新教会の落成式が行われた。

新教会は聖堂、信徒館、司祭館の三部分からなり、聖堂前が、後藤寿庵記念ホールとなつている。このホールには、南小学校児童が作った後藤寿庵の紙芝居、人形と絵で作られた「寿庵歴史絵図」、さらに伊達正宗が、教皇パウロ五世に送った書状の写し、寿庵が使用した家紋染め等が、展示されている。

移転の際、旧教会程の土地面積及び床面積であれば、再開発組合の全額負担となつていたが、駐車場等の理由から、旧面積の2倍の面積となつた。この増加分は教会の負担となり、多くの方々の協力をいただいた。

献堂式は、佐藤千敬司教によつて行われ、県内外の神父、信者、また市関係者、工事関係者等多数に参加。信者一同、その責任に気持ちを新たにし、新教会のスタートを祝つた。

小林有方司教 金祝ミサ説教 (最終回)

五十年を振り返って



キリシタンの里米川

この機会にもう一言ここで申し上げたいことがございます。それは、司教を引退してからの10年という歳月を、私は米川という宮城県と岩手県の県境の小さな村——今では、三つの村が合併して一つの町になりました——その米川というキリシタンの里にあります。

私が司教になって仙台に来て間もなく、その米川というキリシタンの里、殉教者の出たキリシタンの里の話を聞き、宣教開拓に乗り込んで行きました。それがどういうことかわかりませんが、310名という多数の集団改宗があったことです。当時のニュースとして人々の口にはのぼった所です。私は米川を非常に愛しました。景色もよかったですし、空気もよかったですし、私は教区長を引退したなら、そこに居を定めようと思い定めていたので。

教区長をやめて、そこに隠退いたしました。が、今76歳という老齢を迎え、あと四、五年たつたら80歳。昔の人は、「人生わずか50年、70古来まれなり」と申しましたが、今はまあ80でもあまりまれではありませんけれども、しかし、一応人生の終わりがそろそろと思うます。

いつまでも仙台教区民

私は健康も余り害してはおりませんが、わずかに心臓を痛めております。「あまり冷たい所、あまり寒い所にいい方がよい」という医者のお勧めもありまして、今回、佐藤司教様のお許しを得て、この仙台教区を去り、生まれ故郷の関西の方に居を移すことになりました。

司教様はまだ公表するには早いのではないかとおっしゃったのですけれども、このように私を囲んで、大勢の方が集まって下さる機会はもうなからうと思っておりますので、今この際発表する方がよいのではないかと思ひまして、私の決意を申し上げる次第です。

もちろん今すぐではございません。この夏の暑い間は涼しい仙台地方で過して、秋風の立ち始める頃、皆さんとお別れするつもりであります。

長い間本当に有難うございました。この愚かな学識の乏しい私を教区長として、たてて下さったその皆さんの深い愛情、皆さんのその寛大なお心に、どう言ってお礼を申し上げます。今日の50年の金祝に

は、こんなに大勢の方々がお集まり下さって、本当に和やかに私の最後のミサにあずかって下さいました。何と申し上げてよいかわかりません。本当に心から、心の底から皆さんに厚く厚く御礼申し上げます。

たとえ仙台を去るにいたしましても、私はあくまで前仙台教区長でありますし、又仙台教区民でもあります。仙台教区と縁を切るわけではございませんので、何か仙台教区で大きな教区的行事がございました折に、お招きいただきましたなら、いつでも喜んで飛んで参り、皆さんのお顔を是非見たいと思ひます。

今日のごミサ、感謝の祭儀を本当に感謝の祭儀として、神様にお捧げ出来ることを、心の底から喜びたいと思ひます。

メキシコ地震災害へ

義捐金を!!



9月19日のメキシコ大地震は、メキシコ全土に亘って大きな被害をもたらした。仙台教区として、被災者たちへの救援募金が佐藤千敬司教から教区内各小教区・修道院・施設に呼びかけられた。(9月24日付)

仙台教区にはメキシコのグアダルーペ外国宣教会の神父様方が長年働いている。神父様方のご心痛に心を合わせて、救援の募金をしたいとの司教様の意向である。

送金は、郵便振替 仙台6-12305

カトリック仙台司教区事務所

192センチからの日本の眺め (1) ————

宗教は陰気臭い?!

村首ステファノ

一般の人、特に若者は、「宗教は陰気臭くてイヤダ」という印象を持っている。どうしてそのような印象を持っているのだろうか。私たちがそうさせているのではないだろうか。靖国神社に関して言えば、「戦死者の霊を国として慰めることは当然である」という一般の考えがある。クリスチャンが何故反対するのか、一般の人は理解に苦しんでいる。

私も反対するのは当然だと思ふ。ただ、人々が納得する反対の仕方を考える必要がある。

例えば、戦死者のことを考えるのは大切なことであり、キリスト者として積極的に死者のために祈りを捧げたい、靖国神社でごミサなども捧げたい。しかし今の制度では許されない。何故なら一つの宗教のものとして靖国神社があるから。様々な宗教の儀式が可能となるならば靖国神社問題は無くなるのでは。

日本に來た当初、東北大学で勉強した。そして学生たちと色々な話をした。その時、ある学生が、「カトリックは金曜日、肉を食べないんですね」と言った。学生は当時のカトリック教会の小さな規則にすぎない事でカトリックをとらえている。キリスト者であることは肉を食うか食わないかの問題ではない。ただそれが一番強い印象として残っていた。彼に肉のことだけでなく他の面も勉強してもらいたく、と言いたいのだが、誰がこうい

印象を与えたのだろうか。結局、私たちがその印象を前面に出していたのではないか。

キリスト者にとって、占いは迷信。ひとは考える「それ程信じる訳ではないが、興味があるので一度占ってみよう。キリスト者になれば許されない。そして何か負担を感じる」と。これも、禁じられているか否かの問題ではない。キリスト者はもうそういうことは卒業したからいらぬ。例えば、ある子供が、お母さんが明日食事を作ってくれるかどうかを心配し、占ってもらったら吉と出たので安心した、という話を聞けばオカシイと思ふ。子供は自分のお母さんをどういう方かを知っている。それなら占いのところへ行く気も起こらないはず。私たちがそれと同じで、本当に神様を知っていれば将来を神様にまかせ、占いをする事の愚かさ気づくはずである。従つて、占いは迷信だから駄目だというよりやりたい人はやってみようと思ふ。そしてそれがどんなにオカシイことか気づけばいいと思ふ。

教会の教え方にも様々な問題がある。キリスト者は毎日曜日、教会に行かねばならぬ。強調しすぎるとおかしなことになる。例えば、人が婚約すれば、彼女と毎週デートしなければならなくなる。これは大変だ。と思う人がいるかどうか。キリスト者が毎週日曜日教会に行くのはイエズス・キリストとデートするチャンスに恵まれることなんだ、という理解を皆が持てたならば、キリスト教は陰気臭いという印象を与えないのではないか。

【おしらせ】

仙台教区「青年の集い」

テーマ 「いま、信仰を生きること」

講師 ツーゲル師(ベトレム外国宣教会管区長)

日時 昭和60年11月22日(日)20時から

11月24日(日)13時まで

会場 光ヶ丘研修所 983 仙台市東仙台6-1-8

電話 0222-5714348

参加費 二千元(交通費はブルル制とします)

ので、受付の際提示して下さい。

別会計とします。

持参品 聖書・筆記用具・シート2枚

その他宿泊に必要な物

問合せ先 元寺小路教会

電話 0222-2215507

申込み方法 各教会に送付された申込み紙に

必要事項を記入し、次へお申込下さい。

980 仙台市本町一12-12

カトリック元寺小路教会内

「青年の集い世話人」係

世話人代表 藤田 亮(北仙台教会)

※ 青年の皆様、ふるって参加を!!

第19回「新世界」黙想会

主題：遠きながめはたのしきかな

指導：押田成人師(ドミニコ会)

日時：11月22日(日)夕食後24日(日)午後

会場：宮城町聖ドミニコ会祈りの家

費：一般一万円、学生一五千元

主催：思草庵(980 仙台市連坊2-12-16)

渡辺 清方(91-13579)

★ 日帰りでの参加も受けつけます。詳細に

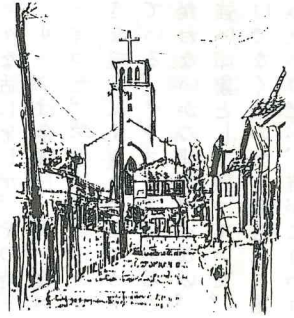
ついては主催者におたずねください。



おらが教会

(56)

仙台・豊屋丁教会



豊屋丁教会の歴史について、同教会の機関紙「むぎつぶ」第二〇〇号（昭和52年12月15日発行）は猪岡近男氏の寄稿による計32ページの「小史」を載せている。その中から二、三の、しかも語句を適宜に継ぎ合わせての上であるが、転載を許していただきたい。

「ヘルリオーズ司教は一九一五年（大正4年）豊屋丁に土地を購入し、南六軒丁にあった総二階建ての仙台市長遠藤敬止の居宅を移築して豊屋丁教会を創設した。初代主任として福島ラザール・モンタグ師（バリエ外国宣教師会員）が任命された」

「パウロ・エグリ師（聖トミニコ修道会員）は病人を通しての布教活動を展開した。豊屋丁教会の受洗者数の推移統計をみると昭和9年から13年までの間で、向山病院で166名、鉤取病院で19名、計185名の受洗者を出している」

「昭和21年、深沢豊治師の提唱のもとに新聖堂建設の運動が起き、その資金稼ぎとして十字架づくりが行われた。青年学徒は夏休みや日曜日を利用して、北は北海道から、

南は九州へと、十字架の包みを背負って販売の旅に出かけた」

「聖堂建設の事業は後任の児山六七男師に引き継がれ、昭和26年10月17日に浦川司教によって献堂式が行われた」（東北新幹線の下りて仙台駅に近づくと、左側に、上りて仙台駅を離れると右側に見えるくる白い十字架付きの教会堂がこれである）

「昭和30年、島田実師の下に小さき花幼稚園が誕生した」（この創立と発展の最大の協力者は、当教会の信徒本宮俊子さんで、現在は学校法人東北カトリック学園の評議員）

教会の現況に移ろう。

信徒総数386名、居所不明179名、信徒実数207名。これが昨年度主任司祭齋藤石雄師から教区宛報告された数字である。

右の居所不明の数字は教区内57教会の中で最高であり、当教会信徒総数の46パーセントに当る。決して名譽ある数字ではない。しかしこれが創立後60年を閲したわが豊屋丁教会の現実である限り、この居所不明の信徒は居所不明のまま、この教会の大切な構成要素のひとつではなからうか。

明るい話題を探したい。

当教会の婦人会は十五、六年程前から、自分達の活動資金を稼ぐために、毎月一回相集まって「飴」をつくり、小型バザーを開いている。顧客は同じ教会の信徒達である。

昭和59年度の支出項目は左記の通り。

- (1) 教会建設資金献納
- (2) NHK海外助け合い寄付
- (3) あけの星寄付
- (4) 暁星園ボランティア

交通費 (5) 教会内諸活動補助 (6) 設備費（冷蔵庫） (7) 飴づくり材料、燃料費。

要するに婦人会は当教会で「母親」、しかも相当前のいい母親である。その上信心深く、初金にはこぞってミサにあずかる。

尚、婦人会は昭和59年6月29日から奥村一郎師の提唱による「聖書深読会」を開いている。指導は木ノ下聖ウルスラ修道院Sr島田恵美子さんにお願ひし、集いは現在まで、12回に達している。

次は日曜学校について。

8月2、3、4日の2泊3日、当教会の日曜学校は松島野外活動センターで夏期学校を開いた。参加児童は計52名で、そのうち日曜学校児童は20名、他は「小さき花幼稚園」の卒園児で小学校の3、4年生であった。

この度の夏期学校程、子供達やその父母達から喜ばれた行事はなかった。「来年もまた」と叫び続ける声は教師達の疲れを忘れさせたことであろう。教会の母親や青年達が日曜学校の教師として奉仕することができるようになったのは、木ノ下聖ウルスラ修道院Sr小川敦子さんによる育成のお陰であった。

当教会の出身司祭は現東京カトリック神学院院长佐藤守也師。修道女は計22名である。（佐々木虎男）

【編集後記】 死の瞬間、ひとは自分の人生の全てを見させられる、とは誰かの言葉である。死者の月を前にして私たちは今すべきことをおろそかにすることなく、また、キリスト者としてキリストの歩みに自分の歩みを重ね合いたいものです。（首）